

創刊のことば

当博物館の窓からは、幌尻岳（2,052 m）の頂上をはじめとする日高の山脈の3月とはいえ燦然たる白銀に覆われ、人を寄せつけない厳しい雄峰を遠望することができる。日高山系と夕張岳の裾に続く山岳地帯に位置する穂別町は豊かな自然に恵まれているところである。

本町の北から南にかけて、白亜紀後期の上部えぞ層群、函渕層群があり、これらの地層から当博物館の主要な化石であるクビナガリュウをはじめとする爬虫類化石が発見されている。

このような地域にある本町では、相当以前からアンモナイト、イノセラムス等が町内外を問わず多くのマニアによって知られていたが、昭和50年、本町在住の荒木新太郎氏によって発見されたクビナガリュウが切っ掛けとなって、昭和57年7月、開町70年、町制施行20年記念事業の一環として、化石を主とした自然史を中心にした展示を道内外の方々の観覧に供すべく博物館を建設したのである。

開館以来1年余りが経過したが、博物館のあり方や活動の方法等もっとも基本的な面で疑問にぶつかりながら、社会教育という分野の一端を担って博物館運営に務めている。

当館では開館以前から本格的に化石資料の収集に取組み、日本では初めてといわれるウミガメの化石、アジアで初めてであろうモササウルスの化石など、白亜紀海生爬虫類の化石とともに、新生代の地層からも、クジラやデスモスチルスの化石を採集している。これら化石資料は一部研究をお願いしているものもあるが、現在鋭意分類、整理、研究に没頭している現況である。

本町の地層から産出した化石資料を中心に、かつこのような化石を研究する博物館のあり方として、本年度より京都大学教授、亀井節夫氏をはじめ、当館にかかわりの深い方々の論文を研究報告という形でまとめていくつもりである。当館のホールに展示してあるクビナガリュウにいささか傾注している面もあるが、この研究報告の発刊を機会に、今後多くの方々の御教示をいただきながら、より充実した博物館として活動するよう職員一同、心がけるとともに、この研究報告をなんらかの参考に資していただけるならば発刊した意義もまた深いものがあると思われる。

なお、この研究報告に論文をお寄せいただいた諸先生方に改めて深い敬意と感謝の意を表し、機会をみて御来館いただけるならば望外のよろこびとするところであり、そのように祈念し創刊のことばといたしたい。

穂別町立博物館長

菅原康次